

# 人間的自然と歴史へのまなざし

—— ヘルダー言語起源論とカント歴史哲学 ——

桐原隆弘

## 目次

はじめに

1. フランス啓蒙の言語起源論
    - 1-1. コンディヤックの『人間認識起源論』(1746年)
    - 1-2. ルソーの『人間不平等起源論』(1755年)
  2. ヘルダーの言語起源論
    - 2-1. 人間——本能の後退と言語使用
    - 2-2. 感覚と言語
    - 2-3. 言語起源論を通じての「歴史の自然法則」
  3. ヘルダー言語起源論とカント歴史哲学
- おわりに

## はじめに

ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー (Johann Gottfried Herder, 1744-1803) は、のちの「ロマン主義」へとつながる「反啓蒙主義」運動の代表格たる「シュトゥルム・ウント・ドランク」(嵐と襲撃、疾風怒濤)の中心人物であり、ゲーテらに大きな影響を与えた。一方、イマヌエル・カント (Immanuel Kant, 1724-1804) は、ドイツ啓蒙 (ライプニッツ、ヴォルフら) の影響下で、これをロマン主義との関連性の深いドイツ観念論へと橋渡ししたと言えるものの、彼自身の論文「啓蒙とは何か」(1784年)が示すように啓蒙主義の潮流により近く、その学問的スタイルはロマン主義とは無縁であるかのようにも見える。そう考えると、そのカントの、いわゆる「批判前期」にあたる1862年から64年頃のケーニヒスベルク大学での天文学、自然地理学講義をヘルダーが受講し、感銘を受けていたというのは、その後の(文化史的に見て)劇的な経緯からしても象徴的な出来事であった。

ヘルダーの代表作は大著『人類史の哲学への諸構想』(*Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*, 1784-91)であるが、この書の成立に当たって大きな影響を与えたのは、カントの『天界

の一般自然史と理論』(*Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels*, 1755)であった<sup>1)</sup>。ところが、カントはヘルダー渾身の作につき、ヘルダー自身の応酬もあったために、二度にわたる長文の匿名批評により、かつての弟子の歴史論における哲学的厳密性の欠如を批判した。この互いの反発にはヘルダーの過剰反応もあったようだが、結果的に、啓蒙と反啓蒙という大きな思潮の対立を象徴的に示す一コマとなった。

「悟性にたいするに感情、合理主義にたいするに非合理主義、外的に規制された形式にたいするに内発的な根原的な生命力の自己主張」という両思潮の対立には、「ドイツ文学」の成立・精神的独立の機運のなか、「人類一般の共通性」対「国民的・民族的個性」という対立軸もくわわるが<sup>2)</sup>、これらの論点いずれもが、カントとヘルダーというかつての師弟のあいだに色濃くあらわれている。そしてこの対立は、最終的には、ヘルダーの(「北方の魔術師」と称され、同郷人カントとたもとを分かったハーマン Johann Georg Hamann, 1730-88にも触発されての)カント『純粹理性批判』への手厳しい(しかしほとんど顧みられなかった)「超越批判」(Metakritik)へともつれこんでいく。

「実践的自然哲学」を標榜するクラウス・ミヒャエル・マイヤー＝アービヒヒは、1784年に書かれたカントの論文、「世界市民的見地における一般史への構想」(*Idee zu allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht*)を「ヘルダーの『諸構想』へのリアクション」だったと推測する。それは出版年からしても、またそもそもヘルダーが『諸構想』の第二部でカントの『構想』への批判を記し、これにカントが二度目の批判的書評をもって応戦したという経緯からすれば、その解釈の妥当性は自明とも言えるであろう。そしてこのヘルダーとの歴史論をめぐる応酬を機に、カントが、批判哲学(とり

わけ『純粹理性批判』および『実践理性批判』に特徴的な「自然と自由」の二元論ではなく、歴史を介して両者を統一的に捉える、いわゆる「批判後期」哲学（マイヤー＝アービヒは『判断力批判』もそのなかに加える）へと思索の歩みを進めていく、という解釈も、一定の説得力を持つ。

しかしながら、このようにカントとヘルダーとが互いに対立しつつも相互影響関係のなかで切磋琢磨しながら共通の問題圏をめぐる考察を深めていったという点だけに注目するなら、カントとヘルダーとの、そして両者の対立に色濃く表れている「啓蒙主義」と「反啓蒙主義」との対立の意味するところを見逃がすことになろう。そしてこのことは、歴史論においてだけでなく、ヘルダーのもう一つの代表作である『言語起源論』（*Abhandlung über den Ursprung der Sprache*, 1772）の「形而上学的」意義に鑑みても十分に留意されなければならない。

ヘルダーは『純粹理性批判の超越批判』（*Eine Metakritik zur Kritik der reinen Vernunft*, 1799）のなかで、カントには言語論が一切欠けていると指摘している。たしかに、ロックやコンディヤック、ルソーといった啓蒙思想家において重要な位置を占めたのが言語の起源に関する（20世紀の言語哲学では克服されることになる、言語と観念の分離を前提とする）哲学的論及であった以上、18世紀段階の合理論と経験論の成果を貪欲に取り入れて独自の批判哲学体系を築いたカントに、いかなる体系的な言語論も欠けていることは奇妙ですらある。カントと同じく、あるいは場合によってはカント以上に、貪欲に同時代の諸思潮を吸収し、独自の思想体系としてまとめる才のあったヘルダーとしては、カントからの歴史論への非難を受けて、自身の比較的早い時期の言語哲学を基盤に、カント哲学の一つの盲点を突いたことになる。

そこで本稿では、カントとヘルダーの論争を検討するための一つの視角として、ヘルダーの『言語起源論』に注目する。ジュースミルヒの言語神授説に対して、おおむねコンディヤック、ルソー流の人間の起源説に同調しつつ、これらフランス言語起源論にも対抗して、独自の、人間的自然、とりわけ人間のもつ感覚（五感）の構造に根差した言語起源説を提唱するのが同書「第一部」の主眼である。だが同書はタイトルの言語起源論にとどまらず、「第二部」

においては言語研究を素材として人類史論にも足を踏み入れている。ここで示される歴史の「自然法則」は、言うまでもなくヘルダーの（『人間性形成のための歴史哲学異説』*Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit*, 1774を経て）『諸構想』において全面的に展開されるが、同時にまたまさにカントの『構想』にも、単に歴史の「（自然）法則」を提起するという論述スタイルにおいてだけでなく、「諸民族・諸人種に共通の人間の自然（人間性 *Menschheit*）」を、理性によって（カント）または言語使用への自然必然性（ヘルダー）によって根拠付ける（その際、結果的にヴォルテールなどの「人類複数起源説」への反論が展開されている）という共通点を見出すことができる。これらは、両者の、「理性対感情」「理性対言語」という明白な対立軸を越えた、共通の志向を浮かび上がらせるものであるが、本稿では、理性の位置づけ、および個人的・民族的個性をめぐるカントとヘルダーの見解の相違に重要な意味があると理解する。

## 1. フランス啓蒙の言語起源論

ホッブズ、ロックといった英国の啓蒙思想家は、それぞれ言語の「起源」については詳細な考察を行っていない。ホッブズが記憶の継続、意思の相互伝達といった言語の機能面に注目して、それらを可能にする「文字」の発明から彼の言語論を説き起している（『リヴァイアサン』第一部、第四章）のとは対照的に、ロックは『人間知性論』のなかの言語哲学の先駆的業績とされる第三巻において、言語を与えたのは神であるとの断定から出発しているものの、その根拠付けはない。続けてロックは、機能面では意思伝達に重きを置き、かつ、伝統的な「実念論」対「唯名論」の続きのような議論を展開するものの、言語の「起源」への踏み込んだ考察はないし、ましてや、言語起源論を通じての人間の自然への踏み込んだ論及もない。

したがって、フランス啓蒙、とりわけコンディヤックとルソーがこうした言語起源論—人間的自然論への口火を切ったと言ってよいだろう。

### 1-1. コンディヤックの『人間認識起源論』（1746年）

コンディヤックの『人間認識起源論』<sup>3)</sup>において

言語論が本格的に展開されるのは第2部「言語と方法」であるが、本稿では、言語と人間的自然との関係について興味深い知見を示した第1部「認識の素材、魂の働き」に注目したい。同書の第2章、第4節、「記号の使用と想像、記憶」では、人間の用いる記号が1) 偶然的記号（一定の状況によって何らかの観念と結合された対象であり、観念が後で思い浮かべやすくなる<sup>4)</sup>）、2) 自然的記号（喜び、悲しみ、苦しみなどの感情を表出するために自然が定めた叫び）、3) 制度的記号（われわれが自分自身で選んだ記号であり、観念とは恣意的な関係しか持たない<sup>5)</sup>）に分類されている。第二、第三の「自然的」言語と「恣意的」言語との違いに加えて、第一の特に個人人の記憶に注目し、「観念を保存するための記号」として言語を捉える点が興味深い。記憶と言語との結び付きは、コンディヤック言語論の焦点と言える。

その点で注目すべきであるのは、第4章、第2節の野生児と言語能力に関する考察である。いわく、もし、熊の間で育てられた人間がいたとすれば、彼は想起の働きをほとんど持たないので、しばしば同じような状態のままで、しかも自分がそういう状態にずっといたということに気づくこともなく、過ごすことになるであろう。記憶がないため、記号も持たない。かつての知覚が蘇って思い浮かぶのはただ、何らかの状況の中でその知覚と結合した対象が偶然目に止まるときに限られるであろう（野生児は、自然的記号と偶然的記号だけを用いるであろう）。結局、この人間は何の反省もしないので、(外的) 事物によって感官に与えられる印象をただ受け取り、本能によってのみ、その印象に従うことであろう。彼はあらゆる点で熊たちを模倣し、熊とそっくりの声で吠え、四つ足で歩き回ることだろう。

また、野生児は他人と交渉を持たないため、観念を恣意的な記号（制度的記号）と結合することができない。つまり彼は「反省」することができない。ただし、「反省」と「想像力」とはトレードオフの関係にある。われわれにとっては記号を用いて観念を呼び起こすのがごく当たり前であるため、映像的想像力が訓練されない。これに対し、野生児はわれわれに比べ一層生き生きとした形で事物を再現してみせる。想像力の訓練がなされ、想像力によってより生き生きとした知覚を思い浮かべさせる。

こうした見解を裏付けるとコンディヤックが考えたのが、1694年、リトアニア・ロシア国境付近で熊に育てられたとされる10歳の野生児が発見されたことである。彼は、あとから言語を習得したのだが、言語習得後は、熊と暮らしていたとされる初期の状態について、記号を介した観念再生としての「記憶」*mémoire* はなかった（直接的イメージ再生としての「思い出」*souvenir* はおそらくあったであろう）。

初期状態についての「思い出」は、反省によって強化されることがなかったため、弱々しく、自力で観念を作り質問に受け答えできるようになるや、跡形もなく消え失せたことになる（言い換えれば、言語使用とともに、言語使用以前の状態のイメージはリセットされたのである）。

言語使用は時間観念とも密接につながっている。個々の知覚に先行した知覚、それに引き続き生じた知覚、それを中断して割り込んできた知覚といったものを野生児は何一つ思い出せない。そのため、彼はその時期に過ごした時間の諸部分を、変化を含むひとつつながりの継起としては思い描けない。個々の知覚は、「継起」ではなく、永遠に続く「一瞬」のこのように見なされていると推測される。厳密に言えば、そのような「永遠・即・一瞬」の意識ですら、言語および時間観念なしには持っていたとは考えられないため、ただひたすら、無時間・無意識の「動物的」欲動状態が彼を支配していたのだと考えべきであろう。

## 1-2. ルソーの『人間不平等起源論』（1755年）

コンディヤック言語論に対し、別の人間観の立場から異論を唱えたのがルソーの『人間不平等起源論』<sup>6)</sup>である。ルソーによれば、コンディヤックは言語の発明者たちのあいだにすでに一種の社会が成立していたことを仮定していた。だが、そもそも、社会が成立していない自然状態においては、相互になんらの意思疎通もなく、その必要もない。自然状態においては、各人は財産もなく、行き当たりばつりに一時的な住居を定め、男性と女性は偶然に結合し、別れるのも容易で、子どもたちも哺乳の習慣からいとしいものとなり、親は子を養育するが、その子どもたちも自分の食物を探す力を持つようになると、母親そのものを見捨てたのだという。

その際言語は自分自身の作ったものとなり、話す個人の数だけ増えるということになる。所定めぬ放浪生活がこれを助長する。

ルソーにとって最初の言語は、危険の際に救助を求め、苦痛を軽減するために発せられる自然の叫び声である。やがて観念が拡がり増加し、人びとの間の交通が開けると、もっと多くの記号が求められた。音声の分節化（音節の区切り）が生じ、観念を定められた記号として表す。これは共同の同意によるのだという。

最初は各々の語に一つの文章全体の意味が与えられた。主語と属詞（述語）、名詞と動詞の区別が生じる。名詞はもともとは固有名詞のみであった（一本の柏の木がAと呼ばれたら他の柏の木はBと呼ばれた——両者の、他の種に属する木と比べた場合の共通点を見出すにはしばし時間がかかる）。動詞は不定法（非人称）現在のみであった。

一般観念の発生は、人間に固有のものである。たとえば一匹の猿は一つの胡桃から別の胡桃へ跳び移るが、この種の果実についての一般観念（「胡桃」の原型）を持っているのでも、この原型を二つの個体と比べているのでもない。それぞれの胡桃の視覚像により以前の味覚の記憶を蘇らせているだけである。「木」一般のイメージを心に描くのは難しい。これに対し、純粹に抽象的な存在はことば（ディスクール）によってのみ考えられる。三角形の定義のみが三角形の真の観念を与える。一般観念を持つためには「文章」にして言い表さなければならない。

このようなルソーの言語論は、自然状態から社会状態への移行という（『社会契約論』（1762年）でも踏襲される）社会モデルを念頭に置いている。とりわけ、言語使用も群居生活も自然本性には含まれておらず、これらはいずれも複雑な欲求を充足するための恣意的な生活様式だと断定している点に特徴がある。ここには、偶然的記号、自然的記号、制度的記号という言語の重層構造を示し、かつ、記憶および時間意識と言語使用との密接な関連を説いたコンディヤックの、人間的自然への存在論的洞察の端緒となる考察（これをヘルダーが推し進めたと考えられる）に代わって、おそらくはルソー自身の人間・社会観（孤独で、善良で、寡欲な未開人という理想像）を歴史へ投影し、つねに周囲の評判ばかり気にかける文明人の墮落を糾弾するという<sup>ホレーミッシュ</sup>反対論的意図

が色濃くあらわれている。

自然的言語（「叫び声」）がそれ自体としては社会的起源を持たないという点に限ればルソーの主張は正しいであろう。しかしルソーは（少なくとも『不平等起源論』においては）社会性、社交性（カントの言う *Geselligkeit*）の意義をあまりに狭く捉えすぎた。家族的慈愛ですら恣意的な観念の構築物だといわんばかりのルソーの説に異議を申し立て、群居生活の自然必然性およびそのなかでの言語使用の自然必然性を説いたのがヘルダーであった。

## 2. ヘルダーの言語起源論

### 2-1. 人間——本能の後退と言語使用

根拠付けのないまま言語神授説を信奉しているロックは、実際には、人間言語の自然的使用についてのみ論じていた。言語の自然的使用（記憶や伝達といった機能面）にのみ注目する点では、コンディヤックもルソーも同様であるが、彼らの場合、動物（または、コンディヤックの場合、「野生児」、ルソーの場合、「寡欲な未開人」）との比較によって、人間言語の特異性、さらには人間的自然の特異性に説き及んでいたと言えよう。ただし、いみじくもヘルダーがスローガ的に述べているように、「コンディヤックは動物を人間に、ルソーは人間を動物にした」という指摘は当たっている面があり、自然的使用の枠内で人間言語の起源を考察する限り、「なぜ人間は言語を持たねばならなかったか？」という問いへの答えは不十分なものとならざるを得ない。

その意味でヘルダーの言語起源論<sup>7)</sup>は、神授説を排しながらも、人間と動物との間の連続性ではなく、質的相違を強調することで、同じく自然的起源を論じながらも、言語論を通じて、人間的自然の全体像をより鮮明に浮かび上がらせている。

ヘルダーによれば、すでに動物として人間は言語を持つ。身体の痛み、魂の情動は叫びとなって表れる。人間は感覚の言語（*Sprache der Empfindung*）を動物と共有している。人工言語（*künstliche Sprache*）が自然の言語（*Sprache der Natur*）を追い出し、市民的生活様式と社交儀礼が情動を押さえつけ干からびさせたとしても、人間は強い感覚を受けた瞬間に自然の言語を直接に響かせる。このように、ヘルダーはルソー流の自然性と社会性・人為性

との対比を受け入れている。だがルソーが群居を不可避としないなど、野生生物との類比を通じて人間の自然状態を推測（ないしは観念構成<sup>コンストラクション</sup>）し、そのことによって人間と動物との連続性を強調するのに対し、ヘルダーは身体組織および感覚器官の構造から人間の特異な地位を浮き彫りにしようとする<sup>8)</sup>。

人間的自然が動物種との類似性を失えば失うほど、動物種の自然言語を理解するのは困難となる。われわれは水中生物よりも陸上生物を、後者のなかでも森に棲む動物よりも群生動物の方を、さらに後者のなかでもわれわれの身近にいる動物の方をよりよく理解する。

言語の起源は神にではなく、(人間的)自然にある。ただし、感覚の叫びはそのままでは人間の言語とはならない。ヘルダーによれば、コンディヤックとルソーは感覚の叫びと人間の言語を連続的に捉えた点でともに誤っている。ここからヘルダーは、前者は動物を人間に引き上げ、後者は人間を動物に貶めていると評する（もっとも、先述のようにコンディヤックは言語と記憶・時間意識との相応関係を指摘し、人間に固有の言語生活を人間的自然の観点から考察しているが）。

人間は本能の強度と確実性において動物にはるかにひけをとる。それどころか人間は、多くの動物種において生得の作術本能（Kunsttriebe）として備わる能力をいっさい有していない。だが動物の感覚能力が高まり、本能が確実になり、その工作物が精巧であればあるだけ、それだけ一層、動物の行動範囲は狭まる。反対に動物のなすことが多様となり、関心を向ける対象が多岐にわたるようになり、生活様式が不定のものとなればなるだけ一層、つまり行動範囲が広範になればなるだけ一層、感覚能力は分散され弱まる。

つまり、感受性および作術本能の強度と集中度は行動範囲の大きさと多様性に反比例する。

ところで人間は一様で狭く集中した行動範囲を持たず、個々の感覚能力は微弱で集中度を欠き、すべての対象に微弱にしか反応しない。さらに、人間の心的能力（関心）は世界のあらゆるものに向けられ、特定の方向性と対象とを持たない。

動物の行動範囲が狭ければ（分節化された）言語は不要である。感覚能力が強くその集中度が高ければ、（動物が——蟻や蜂はそうだと考えられるが

——記号を用いて交信すると仮定して）記号を用いて表現することの意味は自明となる。蜂は蜜を吸うのと同様に本能的にブンブン羽を鳴らして飛ぶ。鳥は巣を作るのと同様に本能的にさえずる。

一方、人間の言語が多様に「分節化」されているのは、それだけ人間の感覚能力が個々分散されそれぞれ弱く、関心対象と行動範囲が多岐にわたっているからである（つまり言語は感覚能力の難点を補う生存の手段である）。人間は本能から行うことはほとんどなく、生まれただけの赤ん坊が動物のなかに置かれたならば無力そのものとなる。それゆえ人間の言語も「本能的に」発するのではない。

とはいえ、言語を生み出す能力が人間の「隠れた性質」(qualitas occulta)として与えられているというのではない。人間と動物の相違は多いか少ないかという程度の相違ではなく、種別上の、本質的相違である。言語こそが人間の本質をなし、かつ人間の動物としての本質から言語を導き出すことができる。

動物の作術能力は人間では認識・思考能力としての理性に該当し、動物の本能（狭い範囲での行動の必然性）は人間では自由に該当する。動物の作術本能をどこまで高めていっても理性や自由には到達し得ないから、これは質的相違である。理性、自由は人間の「類としての性格」(Charakter der Gattung)をなす。鋭敏で集中度の高い感覚と限定された行動範囲、そして作術本能がなくなれば動物は動物でなくなるし、それらが理性と自由の代わりに人間に備わるとしたら、人間はもはや人間ではない。

ヘルダーによれば、ルソーが文明化と社交に人間の不平等の起源を見たことは正しいが、彼は、言語が人間的自然に起源を持つということを明確に示していないのだという。そもそもヘルダーの立場からは、「野蛮かつ強靱な、独居する自然人」は言語を要しないというルソーの想定は、群居生活の不要性という想定とならんで荒唐無稽である。

## 2-2. 感覚と言語

ヘルダーによる、人間的自然、とりわけ感覚の構造に基づく言語起源の説明は以下のように続く。最も重要な論点は、聴覚を、触覚および視覚の「中間感覚」と見、そこに言語起源を見出すところにある。

視覚の発達には時間がかかり、空間、形態、色彩を理解するのは容易ではない。視覚現象は冷たく沈黙しており、言語に最も適した感覚とは言えない。

幼児が羊の姿を見たとき、その視覚像は混濁し、大きさ、形、色を識別するのは困難であろう。だが、これに触れてみれば、感情はより確かなものとなる。さらに「メー」という鳴き声を聞けば、それは曖昧な視覚像を打ち破って心にストレートに入ってくる。そういうわけで、最初に言語を触発するのは耳、聴覚である。孤島にいたとしても自然は耳を通じて自身の存在を人間に開示する。つまり、人間は音によって生きる自然存在としてみずから言語を、支配する知性の徴として編み出した。

鳴き声を持つ動物から、「名前」が響く<sup>9)</sup>。

万物が人間とともに語るように思われ、また万物が人間のためにまたは人間に対抗してはたらくことによって、人間は万物を自分に関連付ける。人間は万物に賛同または反対することによって、万物を愛した憎悪する。人間は万物を「人間的」に表象する。

視覚と聴覚、色と発話語、嗅覚と音はいかに関連し合うであろうか。言うまでもなく、対象においてではない。これらはわれわれの中にある感覚にすぎず、そのようなものとしてこれらはすべてわれわれの中へ流れ込む。われわれ人間は「考える共通感官」(ein denkendes sensorium commune)であり、異なる側面から刺激を受けた結果がこれらの感覚なのである。

すべての感覚の基礎には触覚がある。この触覚こそが、種々異なる感覚内容を内的に強固な仕方ですべてに束ねる。音と色とはまるで異なる感覚だが、それが一度に感じられるなら、触覚はこれらの異なる感覚を一つのものとして受け取る。この場合、理性の推論の及ばぬことを触覚が瞬時に成し遂げていることになる。

異なる感官によって一度に知覚する感性的被造物にとっては、観念を一つにまとめることは必要不可欠である。感覚が不明瞭であればあるだけ、一層感覚は混濁している。

視覚は冷たく、対象との距離があり、かつ明晰である。触覚は暖かく、対象に密着し、かつ不明瞭である。聴覚は視覚と触覚の中間に位置する。幼児の成長過程においては触覚、聴覚、視覚の順に発達す

る。人間はただ聞くことによるのみ、自然の言語の教えることを受け取るのであり、聞くことなくして言語は成り立たない<sup>10)</sup>。したがって、聴覚は人間の諸感覚のうち中枢をなし、他の感覚の紐帯である。

聴覚が言語の感性的起源である。このことを、ヘルダーは以下の諸点から証明する。

#### 1. 感知可能な領域

触覚はすべてを身体器官によって直接に内的に受け取る。視覚世界は身体の感知可能な範囲をはるかに超えて外へ広がっている。聴覚によって感知可能な領域は触覚と視覚の中間に位置する。

理性的被造物が触覚しか持たなかったならば、世界は昆虫のように狭小で、刺激への反応はそもそも言語による分節を必要としなかったであろう。一方、視覚しか持たなかったならば、感覚刺激の広大さと多様性に埋もれ、無数の身振りは発達しても、分節化には思い及ばなかったことであろう。見られ、感じられる対象が音を発するからこそ、その音のまとまりをモデルとして、対象を分節化し、そこから言語が生まれるのである。聴覚は言語感覚であり、これは触覚と視覚の中間に位置する統合感覚である。

#### 2. 明晰性・判明性

触覚は不明瞭・曖昧かつ、混濁しており、逆に視覚は明瞭すぎてまとまりを欠く。聴覚は触覚の曖昧さを明瞭にし、視覚の過剰な多様を整理しまとまりあるものとする。

#### 3. 強度

触覚はわれわれの内部に直接入り込み、強度も強い。視覚は疎隔されたものの間接刺激であって強度に乏しい。これに対し、音はわれわれの内部に適度に入り込むとともに対象と程よい距離を保っている。

#### 4. 持続

触覚は強いが感じられた途端に消える。視覚は一度に多くの像をもたらすため、持続するよりはむしろ拡散する。音は持続し、注意力を集中させる。

#### 5. 表現欲求

触覚は己のなかに埋もれており表現をなし得ない。視覚対象はそこに留まっているため、

ただ目を向けさえすればよい。ところが聴覚の対象は動く。動くからこそ音を発するのである。音を受け止め、運動を捉え、音を発し伝えることこそが言語に他ならない。

なお、ヘルダーによれば、言語が古く根源的であればあるだけ一層、言語は感覚・感情表現を多く持ち、抽象語（一般観念）と論理的構成とを持たなくなる。また文法は言語に関する哲学的考察であり、言語の使用方法である。したがって言語が古く根源的であればあるだけ一層、言語は文法を内に含まず、最も古い言語に至っては「自然の辞書」そのものとなる。これらの「自然」言語観は、ヘルダーの最も重要な師たるハーマンの言語論にも、またルソーの文明批判にも相通じるものを持つ。

### 2-3. 言語起源論を通じての「歴史の自然法則」

以上のようにヘルダーは、人間の作術本能の欠落を補うのが理性であり、したがって言語であること、そして「中間感覚」としての聴覚に言語の起源があることを証明する。ここからさらに進んでヘルダーは、理性・言語使用を中心とする人間的自然を以下のような四つの「歴史の自然法則」として集約的に表現する。

#### 【第1自然法則：不断の進歩発展】

人間は自由に思考し、活動する存在者である。その能力は順次進歩する。だからこそ人間は言語を用いる被造物なのである。人間の本能は他の動物に比べて劣り、まるで創造主に見捨てられたかのようなのである。しかし人間は生来理性を備え自由に行動する被造物であり、劣った本能が却って機縁となって知性と思慮を全面的に発達させ、これらが本能とは比較を絶する能力となった。動物にも記憶力はあるが感覚的かつ瞬間的なものに過ぎず、人間のように反省し一般化し、後に利用し発展させること、つまり文化を継承発展させることはない。動物たちの間でも、生活圏が狭ければ狭いだけ一層、感覚と本能は強まり、作術能力が同様であればあるだけ一層、経験を通じての進歩は見られなくなる。

蜂の巣作りの能力は生涯同一の完璧さを誇り、それはまるで神の完全性の一部が仄かに瞬いているかのようなのである。狐は猟師の仕掛けた罠を一個一個明瞭に見分けこれを逃れることを学ぶが、その本質を

判明に見抜く反省に達することはない。

これに対し、人間は創意工夫を蓄積し、継承し、発展させ、完成させる。そのため人間はつねに進歩の途上にあり、安らい満足しきることがない。人間の生の本質は享受にはなく、不断の進歩にある。人間は死に至るまで人間に成りきることはないが、蜂は最初の巣を作ったときすでに完全に蜂に成りきっていたのである。

進歩のためには思慮と反省が必要であり、思慮と反省は言語によってなされる。人間は言語によってこそ、感情を持つとも言える（この点は、コンディヤックの「記憶＝言語」論と相通じる）。

#### 【第2自然法則：群居・相互扶助の自然的必然性】

人間は自然本性上、社会を形成する被造物である。その意味でも言語形成は人間にとって自然的、本質的、必然的である。

人間の嬰兒はあらゆる動物の中で最も無力であり、両親の庇護なしには生きながらえることすらできない。このことが社会の必要性の根源である。人間は生誕時に無力であるからこそ、相互に一体となって支え合い、教え合う。親や前の世代の得た知識を子や次の世代が受け継ぎ発展させることができる。

個々人は孤立して存在するのではなく、いかなる仕方であれ、集団の一員として存在する。したがって、言語の創出と使用は、(ルソーの言うように)単なる取り決めに従うものではなく、自然の法則に従うものである。

#### 【第3自然法則：民族・言語の多数性】

人類は「一つの」集団に留まることはできない。それと同様に、言語も一つに限られず、多くの民族言語が形成される。気候、風土、植生が言語に影響を与える。

#### 【第4自然法則：人類の単一性】

人類は「一つの」根源から全体として進歩する。同様に、あらゆる言語もそれを用いた教養も全体として進歩する。人間の魂はみずから次々と言語を作り出し、これを発展させる。

### 3. ヘルダー言語起源論とカント歴史哲学

冒頭で述べたように、マイヤー＝アービヒは、1784年の「世界市民的見地における一般史への構想」(*Idee zu allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht*)を「ヘルダーの『諸構想』へのリアクション」だったと推測する。しかし、前節で概観した1772年の言語起源論においてすでにヘルダーは、「歴史法則」という叙述スタイルだけでなく、その「法則」の内容面に至るまで、カントの「構想」を先取りするかのような論述を展開していた。実際、

1. 類としての人間の自然素質 (Naturanlage) の発達
2. 自然素質が発達するために自然が望んだとされる「非社会的社交性」(ungesellige Geselligkeit)
3. 国際協調体制の前提としての一民族・一国家という想定
4. 人類の単一性と気候・土壌等による人種の派生

以上のことをカントは「構想」と前後する諸著作において表明している<sup>11)</sup>。だがカントはこれらすべての論点を体系的・統一的に述べているわけではない。そのため、「歴史の自然法則」の包括性という点においても、またその首尾一貫性という点においても、ヘルダー「言語起源論」の方に軍配が上ると見るべきである。

ヘルダーは人間の言語使用・理性使用を自然必然性として説明した。この場合、言語をもたらす相互依存性(群居性)および感覚の構造だけでなく、人間の自由もまた「自然」法則の一環として述べられている。この点はカントの異論が予想され、実際、(詳述は別の機会に譲るが)ヘルダーの『諸構想』へのカントの批判の論点は、一つには、直立歩形をもって理性使用の原因として説明したとする点にある。カントは理性使用に適した態勢として直立歩形が規定されたとしており、理性使用の自然的起源に重点を置くヘルダーの主張は誤っている、というのである。

ここで問題となるのは、「理性使用と直立歩形」という、ある意味では「鶏が先か卵が先か」にも類

する問いそのものではない(そもそもヘルダーはそういう問題の立て方をしていない)。問われるべきはむしろ、「理性の身体性」(Leiblichkeit der Vernunft)<sup>12)</sup>という形而上学的想定の妥当性である。ヘルダーにとっては、理性使用・言語使用と身体の態勢(直立歩形だけでなく、さまざまな身体器官やその能力、および感覚の構造も含む)とは、それぞれ一体のものであり、全体として「人間的自然」をなすものであった。くわえて、「作術本能の後退を補う言語・理性使用」「中間感覚としての聴覚」という想定に基づいて人間存在の動物に対する質的相違を浮かび上がらせる構想は、まぎれもなく形而上学的議論となっており、人間と動物との連続性に根ざす単なる生理学的考察や自然主義とは大きく異なる。

そうした固有の意味において、ヘルダーは理性使用・言語使用をめぐる「自然法則」を提示しているのである。ただし、マイヤー＝アービヒも指摘するとおり、これは「理性と自然」を二元的に捉える批判哲学構想とは相いれない。だから、カントが「構想」において(また『判断力批判』において)世代から世代へ、類全体として発展していくとされた自然素質(Naturanlage)の中心に人間の理性を据えたとき、批判哲学は大きな修正を被ったという解釈は一定の妥当性を持つであろう。この「揺らぎ」ゆえに、つまり「自然法則」としての、発生論的基盤に基づく理性なのか、それとも超越論的な「自然を超えた」理性なのか、という点が明白でないがゆえに、カントの特に「批判後期」以降の見方は、ヘルダーの統一的・総合的見方よりも見劣りのするところがある。

しかし、問題はそれで片付かない。問題はおそらく、人類共通と見ることのできる人間的「自然」の捉え方と、個人的・民族的「個性」の捉え方にかかわる。冒頭でも触れたように、この点は啓蒙主義と反啓蒙主義の最大の論点である。カントにとって理性は(悟性ととともに)感性の多様性を統一し、空間・時間の制約条件をみずから克服しつつ自我意識および客体認識・意志規定を成り立たせる認識能力であった。そこにこそ、自然法則ならびに実践法則の普遍妥当性の根拠があると、彼は考えたのである。その意味で、(カントにおいては)感性に該当する感覚の構造を理性使用・言語使用の根拠として論じ

るヘルダーの説は（カントは直接にヘルダーの言語起源論について論評していないものの）感覚の相対性・偶然性からは理性の普遍妥当な構造を導き出すことができないという理由から、受け入れがたいであろう。

さらに、人類の単一起源説の立場に立ち、ヴォルテールなどの多元説には与しない<sup>13)</sup>点で、カントはヘルダーと意見を同じくするものの、人間個人および民族の個性については意見を大きく異にする。ヘルダーは各個人、各民族の個性が織りなす人類文化の多様性に思いをはせた。カントにもそういう観点はなくはないが（たとえば『実用的見地からの人間学』）、人類史全体の中に占める民族的個性の位置の解明ではなく、社会契約説を受け継いだ国家論の枠組みを用いて「自由の共存」としての国際平和秩序構想を展開するところに、カントの主眼はあった。

## おわりに

ヘルダーの言語起源論において、「自然法則」としての群居性・類的発展・民族的個性・人類の単一起源は、作術本能の欠落を補いその広範囲（自己に関連する世界全体）におよぶ活動能力を飛躍的に高めるのが理性使用・言語使用であること、およびそれを間接的に証明する「中間感覚としての聴覚」という、単に生理学的知見にとどまらない形而上学的想定によって支えられている。ここで理性はまぎれもなく身体性を備え身体構造の一環として捉えられている。感性の領域へと拡張された理性能力は、感性和理性の区別を強調するカントからすれば哲学的厳密性を欠くものとなろう。しかし、カントはまさしくかつての弟子、ヘルダーの華々しい筆致に影響を受け、彼自身、理性能力を「自然素質」として歴史発展のなかで捉え直そうとした。理性批判による認識原理の基礎付けに従事していた批判期のカントからすれば、この思想展開は「批判後期」とも称すべき新たなステージを開くものではあったが、それは同時に、認識原理、実践原理の普遍妥当性の要求に、若干不用意に歴史要因を混入させることにもなった。その意味でいえば、『判断力批判』は、いわば主観的であるが共通感覚と自然認識を深化させるいわば「疑似的自然法則」としての趣味判断および目的論的判断を扱うという意味で、認識原理と実践

原理の厳格性を保持しながらこれを柔軟化する役割を果たした<sup>14)</sup>。この理性批判の論点と、「歴史の自然法則」の論点とは、容易に接合できるものではないことは、ヘルダーの壮大な歴史哲学構想と、それへのカントの（やや硬直的な）リアクションからも明らかである。そもそも、カントにおいて「歴史哲学」は少なくとも「批判哲学」体系そのものからは成り立ちえないという解釈も成り立つだろう。

いずれにせよ、啓蒙と反啓蒙という思潮対立（理性か感性か、人類の共通性か個人的・民族的個性か）は、文芸思潮の「スタイル」の問題にとどまらず、哲学・形而上学本体にかかわる問題である。この点については、ヘルダーの『諸構想』を機縁とするカントとの対立、ヘルダーのカント批判哲学への「超越批判」を念頭に、機を改めて考察したい。

## 注

- 1) Klaus Michael Meyer-Abich, *Praktische Naturphilosophie. Erinnerung an einen vergessenen Traum*, München 1997, S. 239.
- 2) 手塚富雄『ドイツ文学案内』岩波文庫別冊3、1963年、57頁。
- 3) コンディヤック『人間認識起源論』、古茂田宏訳、岩波文庫。
- 4) たとえば、ある形をした雲があり、そこから雨模様となったことで、雨雲を雨の記号とする。あるいは、ある場所で猛獣に襲われたことから、猛獣をその場所の記号とする、など。
- 5) 一定の特徴をそなえた動物を「ウマ」と呼ぼうと「horse」と呼ぼうと自由である。そういう意味で「観念」と「記号」の結びつきは恣意的である。
- 6) ルソー『人間不平等起源論』、本田喜代治・平岡昇訳、岩波文庫。
- 7) ヘルダー『言語起源論』、木村直司訳、大修館書店。原典は以下を用いた。Johann Gottfried Herder, *Abhandlung über den Ursprung der Sprache*, Stuttgart 2001.
- 8) 身体組織・感覚器官の構造から植物、動物、人間それぞれの存立構造を階層的に描こうとしたという点では、ヘルダーは古くはアリストテレスの靈魂論に由来し、新しくはヘルムート・プレスナーの哲学的人間学に至る系譜に位置付けることができよう。
- 9) これは実際、ヘルダーの言うとおりであって、「モーモー」「ワンワン」「ニャーニャー」「ガーガー」という、乳児の「言葉」に該当する。乳児は必ずしも実際に音を聞いて名づけるわけではない。視覚像（絵・写真）を見て判別し、鳴き声を聞いたこともない動

- 物について、「鳴き声の名前」で呼ぶこともある。
- 10) ただしヘルダーによれば、聴覚を実際に用いることが言語の前提であるのではない。
- 11) 第一、第二の論点は「構想」において明記されている。Kant: AA VIII, *Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht*, S. 15ff. 第三の論点は『永遠平和論』(1795年)で打ち出されており、第四の論点は人類学の諸論文の主題である。第四の論点については拙論「人間の共生はいかにして可能か?—「市民的人格性」および「人間性・人類」をめぐるカントと日本の哲学的倫理学との対話に向けて」(『下関市立大学論集』第61巻第1号、2017年)参照。第三の論点については以下のカントの主張を参照。「個々の人間は自然状態(外的法則に依存していない状態)に置かれるとそのとたんに隣接しているだけで[相互に権利を]侵害することになる。そのため、個々人は自らの安全のために他者に対し、自分自身とともに市民的政体へ歩み入り、そこで各人の権利が保障されるようにすることを要求することができるし、またそうすべきでもある。諸国家としての諸国民はこの諸個人と同様の状態であると判定される。それ[諸個人が相互に権利を保障するために国家を形成するのと同様に、諸国民が各国の権利保護のために形成する体制]は、諸国民連合というべきものであろうけれども、諸国民国家などというものはあってはならないであろう。各々の国家は一つの上位者(立法者)の一つの下位者(服従するものすなわち国民)への関係を内に含んでいるのに対し、諸国民[国家を形成する各々の国民]が一つの国家に集結するとなると、それらは一つの国民を形成するということになるであろう。およそ諸国民国家というものには矛盾があろう。というのも(ここでわれわれは、諸国民がそれぞれ存在するのと同数の国家を形成し、諸国民が一つの国家に合流するというのではないかぎりにおいて、諸国民相互間の権利について検討しなければならないのである以上)諸国民国家というものは[一国民は一国家を形成するという]前提に矛盾するのである。」Kant: AA VIII, *Zum ewigen Frieden*, S. 354.
- 12) Meyer-Abich, *Praktische Naturphilosophie*, S. 240.
- 13) ヴォルテールは『歴史哲学』(*La Philosophie de l'histoire*, 1765)のなかで、諸「人種」(espèces

d'hommes)間の「驚くほどの差異」について「風土(climat)に由来するものではない」(異なる生物学的由来をもつはずだ)とする一方で、「雑種」(race batarde)というきわめて差別的な呼称により、いわゆる「ハーフ」の存在にも言及している(したがって結果的には、異「人種」間の生殖可能性、人類の生物学的単一性を間接的に支持している)。ヴォルテール『歴史哲学』、安斎和雄訳、法政大学出版局、1989年、8頁。なお、人種差別発言で名声を失い、フランシス・クリック、モーリス・ウィルキンスとともに授与されたノーベル生理学・医学賞のメダルを競売にかけるとほど困窮した(落札者によって無償で返還された)ジェームズ・D・ワトソンは、アンドリュー・ベリーとの共著『DNA』(原著2003年)では、ヒトと類人猿とが進化の過程で比較的「最近」(約500万年前)分岐したと、全人類が共通の祖先を有し、約15万年前にアフリカから、もっと古い年代に類人猿から分岐した別のホモ・エレクトゥス(現生人類に遺伝子が一部混入しているとの説のある、絶滅したネアンデルタール人の祖先を含む)と同様、旧世界一体に広がったこと、等、DNA解析による最新の研究成果を詳細に紹介している。同書のなかでワトソンは次のように、研究成果によって多元説は完全に論破されたとしている。「私たち人間は、遺伝的には九九・九パーセントは同じであり、これは他の種に比べるときわめてわずかな違いなのだ。」「…人類の出アフリカが驚くほど最近のことだったと証明される以前は、各人種集団は二百万年にわたり、それぞれの大陸に孤立して暮らしてきたと考えられていた。…しかし、私たちが共通の祖先から分かれたのはずっと最近だというなら、地理的に孤立した集団に大きな遺伝的変異が生じるほどの時間はなかったことになる。…具体的などれかの遺伝的変異は、ヨーロッパの人々の中にもアフリカの人々の中にも等しく見いだせるのである。」ジェームズ・D・ワトソン、アンドリュー・ベリー『DNA 下』(青木薫訳)講談社ブルーバックス、2005年、103-104頁。

- 14) 拙論「目的論と技術的合理性:F・G・ユンガー『技術の完成』におけるカント解釈を手がかりとして」(『下関市立大学論集』第57巻第3号、2014年)参照。